

総合人間学的視点から

山岳登山体験による文化と文明（人工環境社会）解釈の試み

体験には身体が受ける事象と心で感じ取る心象とがある。近代科学は心で感じ取った心象を主観的として排除し、事象をデータに微細化、データの再構成によって示された事象を客観的と評価して体系づけた。主観とされる心の部分を受け持っていた精神分析とともに、情動の作用を解析し、神経科学（分子神経生物学）として確立させようとする研究とが相まって、心の作用が解明されつつある。加えて電子技術の急速な発展は、人間の心とされた脳の機能のいくつかを代替するまでとなり、新たな人間機械論が提示されるまでとなっている。

同様に環境さえも電子技術を介して脳に取り込み、現代の人々はそれを現実と認識するまでに至っている。環境の断面を切り出して情報化し、それを再構成し直し現実として提示する、人工環境社会でもある。人間主体な現代文明は、人の都合により環境に人工の手を加え続けている。それは、環境を破壊し尽すまでエネルギー操作を繰り返すか、破壊の手前で適応バランスを図るか、地球環境文明と人間環境文化の分かれ道にある。

自然を舞台に登山活動を重ねてきたわが国の岳人達にとっては、「人が自然を支配する」という感性は持ち得なかった。自然と対峙した人の強さとはかなさの体験は、人が自然の中で生かされている存在であることを教えてくれた。この山岳登山体験から現代の人工環境社会解釈への試みは、ドグマに陥ることなく人類の現代・未来社会創成に向け、貢献できるだろうか！

田中 文夫 （神奈川県）

[総合人間学会会員]

1. 体験の主観性と客観性

近年、「主観」とされる人の心の状態は脳研究から解析されつつある。脳機能イメージング技術や分子神経生物学らのニューロサイエンスによって解き明かされ、主観的とされた経験を科学的メカニズム及びシステムとして、新たな枠組みを示している。

マーク・ソームズとオリヴァー・ターンブルは「**脳と心的世界**¹ (*The Brain and the Inner World*)」で最新研究成果をまとめて

いる。『非物質的な意識、〈精神〉とは何であるかを問い、〈意識〉を主題としてこれまでの哲学的命題を科学的問題へと変換させ、〈気づき〉を生み出す神経メカニズムの解明』を果たしつつある。

脳にインプットされている、あるいは後天的にインプットされ、人間の最も基本的かつ生物学的欲求である〈情動(emotion)〉を、脳のメカニズムとして捉える。

また、人間行動の動機づけを価値のシス

テムとして、「基本情動司令システム」を4つに分類し、哺乳類に共有される進化の中で原初体験を記憶しつつ今を体現させるとする。

遺伝子によって受け継がれ、情動により駆動される定型行動とともに前頭葉を発達させ、その「学習メカニズム」によってそれぞれの環境に適応すべく、脳の経験依存的なシステム構造を強化させる。

「学習メカニズム」による<経験>は<記憶 (memory)>として短期と長期に分かれて固定化される。記憶は同時に、発火する細胞群の連絡網によって活性化され、シナプスでの刺激の繰り返しはより長期な記憶へと定着されてゆく。このメカニズムが委縮・欠損すると忘却や抑圧、健忘等の症状となって現れてくる。

個人的経験は日常生活の中で、あらかじめ定められた範疇の知識や行動として組織化される。大人は自らの過去の経験を世界として投影し、自らを取り囲む世界を構築する。この大人の世界は知覚と記憶によって<現実>とのづれが生じる。乳幼児の知覚は感覚に依存し、発達の過程における学習体験により抽象化された知識となって、知覚過程をも支配するようになる。

このように、経験（体験）を通して得る主観性は客観的事実の一断面であり、最初的主観によって事実の知覚が始まる。知覚される面が増えるほど、また他の主観によっても同じ知覚として記憶に定着されると、それらをもって客観へと移行する。主観的体験の記憶を言葉に変換させ、数式に変換させ、また、体験の経過をデータによって示し、それら一連の行為を経てより客観性が獲得される。

近年の登山や山岳体験はその記録性ばかりが注目されてきた。自然に分け入り体験から感化される「心の諸問題」は、この半世紀来軽んじられている。人類文明のゆきづまりが環境問題として、特に気候変動への対応は緊急性を要している。エベレストが初登頂された1953年以来、山岳と登山の社会では、限界の先にある多様化と共存の社会へと変質していったのであるが、そのことが示す文化的、文明的意味について論じられることがほとんどなかった。日常の社会は右肩上がりの経済成長路線を前提とした体制を今も続けている中で、限界の先にある多様化した共存・共生社会のイメージに欠けている。山岳文化が内包する非日常的諸要素を、今こそ実社会の日常性の中へ還元（フィードバック）できる時節にある。

2. 文化と文明の概念

文化と文明の概念をめぐって、[米山²](#)は次のようにまとめている。

『日本語の“文化”という言葉は二重の意味をもっている。一つには“[すぐれたもの](#)”という意味があり、もう一つには“[人間の生活行動様式とそれを支えるすべての価値観を指す](#)”』

前者はドイツ語の Kultur（耕す、教養）の訳語として当初から用いられ、後者は第二次世界大戦後、アメリカの学問が浸透して用いられるようになったという。現代の社会学者らはアメリカ風に捉えているが、一般にはドイツ風の理解も現存するダブル・ミーニングとなっている。

フランスの歴史学者フェルナン・ブローデル(1902-1985)は<文明の文法>の中で文

化と文明という言葉の語源論を述べている。元来フランスやドイツでも同義語として扱われ、ドイツ人のヘーゲルはベルリン大学講演の中で、区別なく用いていたという。

一方では文化を文明よりも価値の高いものとする見方がドイツに広まり、カント、ヘーゲルなどの哲学、ゲーテ、シラーなどの文学、モーツァルト、ベートーベンの音楽など学問や芸術の価値の高さを讃え、文明に対する文化の優位性を主張したという。

さらにブローデルは文明という言葉は単数から複数へ移行したといい、文化を「精神の生の個人的な全形式」として用い、文明を「集団的な諸価値をさすもの」としているという。

イギリス人類学の父とされるエドワード・B・タイラー(1832-1917)は文明と文化を同義語に捉え、『文化あるいは文明とは、その広い民族誌的な意味において、知識、信仰、芸術、法律、慣習、その他、およそ人間が社会の成員として獲得した能力を含む複合的全体である』としている。

論者は以上の概念をふまえ、現代の宇宙論と地球環境社会の中で、個の体験を踏まえていかに見直されるか、試論を試みた。

3. 宇宙の中の人間から考察する

文化と文明

宇宙物理学者 小尾³ は<宇宙から見た人間>の中で、宇宙原理として「宇宙は大局的に一様かつ等方である」ことを述べる。また、現代宇宙論における人間象を次のように列挙している。

① 人間の存在は、140億年もの長大な時間をかけて宇宙の中で準備され、地球環境の中ではぐくまれてきたものである。

② 宇宙から見ると点のような小天体に、宇宙の時間ではいまの瞬間を生きる。

③ この数百年の間に急速に進んだ科学と技術によって、人間は宇宙のほぼ全域を観測し理解し、誕生以来の進化の大筋を理解した。

④ 宇宙を観望し考えることが、科学と技術を含む今日の文化を導く原動力となった。

さらに新しい宇宙論の原動力として次の二つを挙げている。

① 新しい技術に支えられた宇宙観測技術

② 20世紀に興った新しい物理学、相対性理論と量子力学

そして「人間にとって宇宙とは何か」と問う。『人間にとって、地球を含む宇宙が自然環境のすべてである。人間の文化の多くがこの自然環境のなかで育ってきたことは、たとえばS・アーレニウスの<史的に見たる科学的宇宙観の歴史>(寺田寅彦訳)に詳しい』と。

さらに「宇宙にとって人間とは」を問い直す。『140億年余りに前に時間とともに誕生し、過去と比較できない長い未来をもつ宇宙にとって、人間とはどんな存在なのか・・・宇宙から見れば人間は、無数の銀河の一つの、数えきれない星の一つを回る点のような冷たい天体上で、銀河の時代のごく初期に、宇宙論的には一瞬だけ現れた特異な存在である。人間のなかには、ビッグバン以来の宇宙の痕跡が認められるが、人間が宇宙に残すものはない。ただ、今の宇宙は、人間の存在によって自覚していることだけは、宇宙にとって無意味ではないし、人間を宇宙の特異な存在としている所以である』と。

人間が宇宙を語ることににおいては、方法論のパラドックスが生じる。「部分が全体を語る」ことへの矛盾である。しかしこの矛盾を抱えつつも、人間はより多くの宇宙を知ろうと推論と観測の実証を繰り返し、宇宙年齢 140 億年をつきとめるに至っている。知能の成せる業である。

一方で人間は宇宙真理を「神」の概念に置き換え、全体（神）と部分（人間）を再構成して把握する知能をも備えている。このこともやはり宇宙の中で特異な存在として、宇宙時間の一瞬に生きている知能生命体としての人間の存在であろう。

この知能はまた、宇宙の終わりへのメカニズムまで推論する。終わりを自覚して今を生きる生命体であることが、宇宙原理の必然のしがらみを解き放ち、人間の束の間の自由として偶然の中で楽しみいざなの享受へと誘う。この行為を論者は「文化」と位置づけ、改めて文化と文明の定義を考え直してみると次のようになる。

<p>文化→宇宙の必然性に逆らって享受する人間行為</p> <p>文明→宇宙の必然性に則って享受する人間行為</p>
--

一例として岩壁登攀における快樂享受を示すことができる。必然の法則からみると岩壁登攀などは無謀以外の何物でもない。宇宙原理からは岩壁を攀じ登る必然性は全くなく、例え攀じ登ったとしても重力に従い、墜落・死亡することは自明な論理である。しかし訓練を重ねてその必然に逆らい、オーバーハングの克服や、誰も歩いたことのない頂への登高など、極めて困難とされるほどに興奮と享樂の真情を獲得できる、という論者の実体験がある。

限界に挑むスポーツの記録や芸術的バレーナの跳躍など、重力に逆らい自由となった一瞬における身体の快樂享受が、行為者に行為への努力を継続させる理由として考察される。

芸術と称される絵画や写真においても、現象から感知する印象が消滅することの必然に逆らい、その現象を切り取りキャンパスやフィルム等のメディアに定着させようとする行為、と述べるができる。

これらは普通に**文明行為**とは呼ばず、**文化行為**とされ、先の定義の範疇に収めて理解することができる。

4. 生態学から考察する人工環境と文明

法哲学者 **佐藤**⁴ はヒトが脳をもち、言語システムを発達させてきた生態学の視点から環境を捉え、『<環境>とは、人間が対象を経験的に認識したことを言語もしくはその他の記号で表出したものの堆積の全体、つまり<人工環境>である』という。『<人工環境>を西欧近代の原理とし、<人工環境>をインターフェイスとする活動は**自然の征服**であり、**自然の破壊ではないか**』ともいう。さらに『地球上に開拓すべきフロンティアはまだ残されているだろうか。新しいフロンティアがないとすれば独立不羈のこの近代精神はどこに向かうのか・・・何か別の<人工環境>がそれにとって代わらなければならないのか』と問う。

一方、哲学者 **坂本**⁵ は<機械としての人間～人間機械論の深底とその射程>の考察から、新しい人間学の系譜において、20 世紀のサイバネテックスの時代から 21 世紀 I T の時代へと進む中で、<人間機械論>

定着を示す。

『生命現象を物質現象へと還元して論証すると、「人間は機械である」というテーゼは抽象論議を超えて、具体性をもって迫る。「自由意志」による行動も、実は生理学的な反射の行動とみることもでき、自ら自由に選択したと思う意識の事実¹にすぎず、実際自由に選んだこととは別な問題である』

『ある行動が自由選択の自覚をともなう意識的行動であったと思っても、その実は行動が強制させられた外的条件を予測・自覚・検出ができなかっただけであり、それらはシステムの中で統合されていた。この人間行為が本能的欲求として把握されると、真・善・美らもろもろの人間の価値は存在感を失ってしまう』と。

人間機械論の視点からはヘドニズム（快樂主義）として人間の意志を捉え、倫理的価値、美的価値、人生の価値等を内に含んだ「人間機械論」が成立する。

カントを頂点とする理性主義とヒューマニズムは、自然を征服・破壊して成り立たせてきた人工環境同様、「人間の人間による人間本位な思い込み²」として、現代科学が解析した脳システム（機能）の中に集約されてしまうという。かつて理性とされていた中味は、問題解決能力、予測能力、管理調整能力等々、種々の機能に分解され、それらを再統合させるシステム哲学こそが、人間機械論の哲学であるとする。

現代科学の進展は、人間の知覚・感覚を感知統率する部位が脳にあり、それぞれがホルモン分泌等を〈信号〉として得、視床下部や松果体で統括されて感知されるとしている。つまり事象（環境）の認識は全て信

号に変換され、その信号に付与された意味〈情報〉によって認識されることから、〈人工〉という概念が導かれている。またその行動出力として、神経細胞の活動脳波信号伝達をBMI (Brain Machine Interface) センサで取り出し、車を運転する機械制御への応用等は、人の代替機能に活用する〈人工環境〉となり得ている。

この〈人工環境の創造〉を「文明」と称してみると、その特徴の第一は物質に還元されて表現される形而下な面にある。第二は非可逆的向上進化を図る方向性にある。その方向へ向かい環境を食い尽くすまで進むか、食って吐き出した二次環境に逆襲されて文明を滅ぼすか、文明は後戻りできない人類の欲望に支えられる。

ルネッサンス期に定着したヒューマニズムという人間観は現代にも生き続けているが、人類の歴史はルソーのような人間性善説ばかりを書き留めてはいない。「悪貨は良貨を駆逐する」という今や古典的となったグレシャムの法則は、新自由主義経済という現代グローバリゼーションの中で、弱肉強食の性悪な一面や、社会の相互依存を壊し格差と差別の顕在化をもたらせ、現代社会を二極分化させつつある。また、マキャヴェリやホブスのごとく、人間性悪説から統治論を説く先達もいた。

人間の機械性をシステマチックな人工環境社会へと再構成する中で、人類未来が宇宙環境に適応して生き延びるためには、宇宙の中で奇跡的に存在する人間感性からのフィードバックが、大きな役割を果たす。そのことは宇宙の必然に則って適応を図る人類文明にとり、それだけでは発散・蒸発とならぬためのネガティブフィードバック

が不可欠となる。必然と逆位相な存在、つまり人間の欲望を反省、自制し、必然に逆らって享受する「**文化の質の高まり**」は、宇宙における人類存続を引延ばす人類社会の「**ゆとり**」となる。

5. 人工環境と情報

1. で述べたマーク・ソームズとオリヴァー・ターンプルは「環境とは何か」を次のように述べる。

『ある細胞に何か作用するとき、細胞の視点からは、その当の作用因子が身体の内部から来たものなのか外部から来たものなのかは問題ではありません。細胞は変化の発生源を区別することはしません。細胞の観点からは、その小世界の外部にあるものはすべて「環境」なのです』

さらに環境の知覚において、『「精神的」や「物質的」という区別は単に観察上の視点の違いによって作り出されたものにすぎず・・・あらゆる事象はそれが適当な視点から観察されれば、どこからやって来るかにはかかわらず、物質的な事象になります・・・「環境」とは常に物質的に媒介されたものです』と。

現代の〈人工環境〉は〈情報〉によって知覚させられ、知覚→応答も〈情報〉により入・出力を得、人間行動を導いている。その情報はニューロン (neuron) とシナプス (synapse) によって構成される神経伝達システムの中を、ドーパミン、セロトニン等々の神経伝達物質 (neurotransmitter) の化学作用によって成され、情報伝達される。

認識→応答の判断機能をコンピュータはCPU 設定プログラムに則っておこなうが、その設定は人間のプログラマーによって成

される。プログラムを創造する〈人口知能〉の研究も、今おこなわれている。

人間のCPUは「脳システム」がつかさどり、判断プログラムの設定は「心のシステム」が担っている。心のメカニズムを解明し、システムとして捉える人間機械論の中で、人間と機械の差異をどのように確認できるのか、まだ確立されてはいない。体験データの蓄積と、直観データの組み合わせがどのように新たな創造に結び付いているかの解明により、より確かな確認ができるのであろう。

〈人工環境〉の中で人が判断する行為を論者は〈環境デザイン〉と称し、**定義**⁶を試みている。『環境デザインとは、ある時限における環境の諸要素と領域を特定し、その文化的価値を定める行為』と。

一方で人間社会は自然の中から資源を取り出し、技術を駆使して加工を加え、道具や商品へと変換させて文明を維持させている。人工環境は加工品である〈人工物〉によって、生活環境を固めている。

人は個体生存環境のみでは生命の継続が難しく、より安定を図るために集落を形成してきた。今やその集落は〈人工環境〉の典型となる都市を形成し、〈人口環境都市社会〉へと進化し、その中での安定感・安心感を持っている。それは危険意識から逃避した人工環境という群れを成し、群れの中の無意識化でもある。

人工物の生産は情報により人々へ伝達され、交換という経済活動によって再配分・消費される。現代の新自由主義経済社会においては分業による大量生産・大量流通・大量消費を地球規模でおこない、人の心の無限な消費の欲望を煽りたてている。さら

に大量廃棄されるゴミ文明、この無限な人類の欲望が宇宙環境に容認されるか否か、答え方によって環境への対応は分かれる。

山岳文化において、1953年エベレスト初登頂の意味は、高さを獲得する無限活動領域から、有限領域活動への転換となった。人類はそれよりも高い高度へ徒歩で達することができなくなり、登山における基本原理「徒歩により、より高みへと登る行為」は、8,848m(エベレスト)という有限下の領域で、条件の差別化を定義したそれぞれの形態、それぞれの記録へと細分化され、そのことはまた登山の<多様化>とも呼ばれる。

現代地球上の人間活動と気候変動の関連性は理解し易いデータや現象により、人工環境が極めて微妙な自然環境とのバランスの上に成り立っていることを示し、人間活動の無限拡大方向へ警鐘を鳴らしている。

地震、火災、風水害等自然災害や、宗教、人種、格差間紛争等の人為的差別化は、依って立つライフライン・バランスを容易に壊し、大都市といえども極めて脆弱な局面を見せてくれる。

一般に<環境>とは<自然環境>をいい、その中に人も含まれている。しかし環境破壊による人類の危機とされる現代文明において、<自然環境>と<人間環境>とを明確に分けて扱わねばならぬほど、人間の文明活動は地球環境容量にとって無視できない存在と認識されている。

その端緒を担ったのが1968年に発足したローマクラブであり、「地球の有限性」を共通認識とした「成長の限界」というレポートをまとめた。1972年の国連人間環境会議では開発と環境、資源保全と管理が議題にのせられた。1992年の環境と開発に関する

国連会議(リオ・サミット)では「気候変動に関する国際連合枠組条約」が採択され、1995年の第1回「締約国(先進国)会議(COP1:ベルリン)」以降、現在に至っている。

一般に地球環境問題は自然環境問題として捉えているが、実は「人間自身の欲求とその制御、つまり環境に加工を加えて人間生活の快適さを図る人間文化意識の問題」として捉え直すことこそが、地球環境問題のより本質であるとの認識が、本論の考察として示すものである。

科学的データとして扱える「自然環境問題」と、人の価値意識を扱う「人間環境問題」とに大別し、前者を「文明問題」後者を「文化問題」へと整理することにより、どのような整合が見出せるのか、あるいは不整合となるのか、本論の試みとなる。

依ってその方法は証明形式ではなく論述形式となる。

6. 自然環境と人間環境

人は、人の人たる本質(個)と、人々として社会を織り成さねば存続できない継続した社会(歴史)的存在者としての本質という、二面性を持っている。その二面性は実社会の中で互いに矛盾した立場として相克して現れる。

近代社会において個の解放(尊厳、自由意志、平等な権利)による欲求行動の歴史は、他者を顧みる余裕を失うほど過剰となった現代社会において、人工環境は地球の自然環境を大きく変質させる要因として顕著に現れ、現代文明崩壊の危機を感じるまでとなっている。

環境破壊による人類の危機とされる現代

社会において、〈地球環境問題〉は〈自然環境問題〉と〈人間環境問題〉とに分けて扱わねばならぬほど、人類の活動と作用は、地球環境にとり脅威な存在と認識されるに至っている。自然環境問題をデータとして正確に把握した上で、人間環境問題へ対応することこそが、地球環境問題解決の根本であることの認識が不可欠となる。

- ① 自然環境問題：人の進化性（文明）
- ② 人間環境問題：人の相反性（文化）

人間環境問題の抜本的解決において特に注目すべきことは、人間の限りなき欲求を抑制する機能（ネガティブフィードバック）である。人がそなえ、教育で培う「美意識と倫理観」、それらを支える「思想・哲学・宗教や信仰」という〈心〉の内面形成にかかわる〈文化〉が要となる。また、文化を普及させる手段として、言葉（メディア）と交流（コミュニケーション）も不可欠となる。

そこで4.の佐藤の設問に答えるべき「地球上に残されたフロンティア」として、論者は「人の心の小宇宙」を挙げるものである。北極、南極、エベレストに次ぐ地球第4の極地として、「人の心の小宇宙」への探求を提起するものである。地球上に残された最後のフロンティアとして、総合人間学研究の微分的帰納方向は、環境文化形成の依って立つスタンスとなる。他方、「人間はどこにいくのか」とする積分的演繹方向は、論者のヒマラヤ遭難における生還体験とその後の変遷の中から、「心の行方は無目的」とするニヒルな実感を持つに至っている。それは3.の小尾が「人間が宇宙に残すものはない」とする、宇宙から見た人間の帰結

と合致する。

同時にもう一つ別な心の存在は、愛する対象を日々探し求め、交流（コミュニケーション）により安堵を得ようとする儂^{はかな}さもある。このことは科学的数値に変換されたデジタル表現では伝えにくく、言葉の多様さの連続の中でアナログ表現となる人の心の機微を反映し、文学となって周知されている。アナログ量を量子力学的に考えれば、ミクロな瞬間のデジタル量が共存（集合）されたものとして、アナログ量をデジタル信号へと再構成することもできる。現代の音楽レコーディングと再生はこの手法による。

このように人間の在り様を数学表現できないものかと思案するが、現在は複素数で止まっている。心の不確定性と同様、ミクロな物質の不確定さを扱う量子力学が複素数で表現されることは示唆に富む。

複素数＝実数＋虚数（ i ）

実数を構成する部分は人間の社会的存在としての「建前」を表し、虚数を構成する部分は人間の個たる存在としての「本音」を表す。虚数を示す記号 i (imaginary) は「愛^{あい}（love）」へと連想が及び、「愛」という心の活動こそが文化進展のエネルギーと化し、宇宙における稀有な生命活動体・人間の人間たる所以となるのではないか。

宇宙を理解する〈相対性理論〉と異なり、宇宙の中で人間活動の在り様を考えると、愛（ i ）を接着剤とした〈相補性理論〉が確立できないか！思案の中にある。つまり、強者が強者でいられるのは、強者と認められる一面だけにおいてであり、異なった局面においては必ずしも強者たり得ない。弱者についても同様に述べられる。そこで<

相補性理論の基軸となる思考は、宇宙に実在する人間の在り様は、あらゆる局面において強者と弱者の補完関係の確立、つまり「文化の形成」にあり、その接点となるべく愛(i)の認証となる。

数学において最も美しい表現とされる「オイラーの公式」は、指数関数と三角関数が虚数を仲立ちとして関係づけている。

$$e^{\pm i\theta} = \cos \theta \pm i \sin \theta$$

この式の θ に円周率となる無理数 π を代入すると、有理数の-1となる。

$$e^{i\pi} = \cos \pi + i \sin \pi = -1$$

さらに「i=愛」と仮定をしてみるが、愛は数でないから数式を構成しない。しかし複素数の二次元ベクトル表示をしてみると、ゼロを核とした4方向性を表せる。地上の方位に置き換えれば東・西・南・北となる。

図形としては横にx軸、縦にy軸として直交させ、その交点をゼロとして±に分割すれば、4つの性質区分表現ができる。この性質は交点ゼロを軸とした対称面に正反対な性質を位置づけ、両者を合わせると相補関係を成しゼロとなる。両者を反目させると相対的關係になり、より全体を表現することができる。論者の着目は文化という人間の相補性にあるのだが、生態系の現実には弱肉強食、森林生育過程での間伐のよう、相対的に強者が生き延び弱者が滅びることにより、強い種の存続を果たそうとしている。そのような現実は、環境保護の生態系管理において「予防原則」を導き、管理する生物、管理される生物、排除される生物のいずれかに分類されてしまう。このバイオ・ポリテックス（生命政治）の考えは、深く静かに進行し、ニーチェの<ツァラトゥストラ>で語られるよう、「人間が家畜化」

された「人間の園」、異物が排除されて安定したIT社会のイメージは容易に導き出される。しかしその社会はやがて生命のエネルギーを失い、消滅する必然も負う。

一方3.で述べた必然に逆らって享受する人間行為を「文化」と認めれば、「人間の園」を飛び出す相克のエネルギーによる多様化をうながし、前者よりも長く生き延びる可能性が生じよう。

7. 山岳登山体験と文化

登山は山岳という自然領域に分け入り、麓から山頂までの高みを極める行為において、その過程の中で自然とまみえる相克や感受、観察や記録等を経る体験や、更なる真剣度を増すにつれ、生と死の直接体験さえもすることができる全人的行為となる。登山が全人的行為と認められるならば、その中にはすべての文明と文化要素が含まれているはずである。

しかし登山とその体験の特殊性は、何も好き好んでやらなくてもよい「非日常性」にあり、宇宙原理に逆らう行為を楽しむ人間文化の稀有さは、宇宙時間の中における人間の存在と合致する。

日常と非日常との違いはこれまで述べてきた文明と文化の相違としても表現できる。

2.で述べた集団的な諸価値がさすものを「文明」とすれば、その価値は日常とする一般社会の中にある。他方、精神の生の個人的な全形式を「文化」とすれば、それは日常とともに非日常な世界において最も発揮される。特に山岳体験は日常的な人工環境から抜け出すことさえ一つの目的となり、非日常的な自然環境に踏み入ることが最初の目的ともなる。その中で「精神の生の個人

的な全形式」を投じて自然と交流・対峙する行為によって、「文化」の文化たる所以として行為される。

衣・食・住を携えて非日常領域に分け入る登山体験は、日常生活の中へも還元することができ、日常生活における〈ゆとり〉を生み出す。例えば自然災害や人為災害等、日常の中で突発的に現われる非日常的状況にあっても、登山体験の蓄積は心の余裕を生み出す。テント生活、炊事技術、応急医療技術、多くの不足に耐えて切り抜ける忍耐力、取得した登攀技術を生かして危機状態からの脱出行為を図ることもできる。そして何よりも、日常の中で非日常を意識する心の訓練は、例え非日常状態に陥ったとしても危機への受容が容易となる。ここに実例を述べることはできないが、生死を含む論者の様々な体験から生じた所見である。

また、人の死は宇宙原理として日常の中に組み込まれているのだが、現代日常生活の中では死を隔離した人工環境（病院等）に閉じ込め、専門家たちの手によって取り扱われている。それゆえ日常感覚の中で、死の事実との対面や死に至る心構えの醸造といった、宇宙原理を受け入れる訓練が、現代の〈人工環境〉の中では極度に不足している。

激しい山岳登攀や深く分け入った大自然の懐きなど、生と死の境界をさまよう体験や、死の決定を受け入れなければならない登山体験等を経てみると、知識だけからでは得られない人間の総合力を身につけることができる。この体験から湧き出すさらなる問いは、〈生きるとは何か〉、〈人間はどこに向かうのか〉という、まさに総合人間学が主題とするテーマに重なる。

この山岳体験は余暇の享受（遊び）や学問領域をも超え、宗教的実践、思想的実践へと昇華する領域もある。脳内論理の組み立てや思索ばかりでなく、実践という身心行為を経た体験から導かれる論理や思索が、未体験者に対して論証や説得の力が持てるとするならば、学びの領域を超えた「文化」として、人間総合力に結集・蓄積することができる。

論証や説得の力となるべき内容は、3.の佐藤が述べる言語もしくはその他の記号で表される総体から構成されるが、その総体を「文化」と称すれば、佐藤の述べる〈人工環境〉とは異なった人間感性をも含んだ複素数的内実となり、「文明」とは一線を画した理解が必要となる。

論者の提起する「文化」の特徴の第一は非物質的な価値、倫理や心を領域とした形而上な面である。第二は可逆的向上進化を図る方向性にある。それはまた「歴史は繰り返す」がごとく、同質的事象は周期をもって繰り返し出現することを示す。文化の中身は向上進化を図っており以前と同じものではないが、その性質は相似した同質なものとなって周期的に繰り返し現れる。

このことを自動制御回路的に述べれば、フィードバック（帰還）回路によってその系をコントロールすることを意味する。出力と同質でポジティブな性質を帰還させると同質性は拡大増幅され、その極限はバブルのごとく治まりのつかない発散状態にまで至る。一方、相反するネガティブな性質を帰還させると出力の性質は収束に向かい、その極限は相反性に占拠される。この二つの機構を繰り返し、その系の安定を保つのが自動制御回路である。

さらに人間学的に述べれば、向上進化は人の持つ生物学的特性であるが、理性や感性の総体として安定を求める人の心の欲求は、文明社会の一方方向性に相反した向上進化を図るべく、社会的保守の力として作用する。欲望はエネルギーを帯びたポジティブな性質を持ち、理性は状況概念のバランスから欲望を抑え、沈静化させるネガティブ要因でもある。文化は知能の理性によって抑え、感性に刺激され向上を図る。

また数学では三角関数を4回微分すると元に戻る性質があるように、正弦波は1サイクルで元に戻る。その連続はアナログ量の交流波を示し、時間に連続させた量の変化を表すが、質の変化は示しえない。

一方、コンピュータ駆動に代表されるデジタル信号は非連続な離散した時限信号であり、量は数に変換されて処理される。

デジタル信号の裁断された時限を構造化（量子化=A/D 変換）させ、アナログ信号（D/A 変換）に近似させることができるのは、先の6.でも述べた。裁断されたデジタル信号処理は2進数（1桁=1ビット=0, 1）を基礎に、8進数、16進数、32進数等のプログラム言語を用いることにより、高速演算や分割・圧縮・蓄積処理等が可能となる。

アナログ信号情報の連続性は生命の連続と継続性にも類似するが、確定した未来予知とはならない。むしろ過去の事象を連続させた歴史として位置づけられ、その中に繰り返して現れる同質性を見出すことができ、それを「文化」として整理することができる。

もし論者が山岳登山体験を持ち得なかったならば、論者の心は個別化の原理障害⁷

を増長させ、自他逆対応状態となる「統合失調症」に陥っていたかもしれない。その後のヒマラヤ登山における遭難と生還の臨死体験や、息子の死を受け入れなければならなかった親とした受容の心は、ニーチェを読み登攀に情熱を傾けた青年の時の「力への意志」たる山岳実践へとは向かわず、論者の心の内に向った山登りとなった。おかげで統合失調症に陥ることなく、常軌の範囲に収まっているようだ。

その後、関心の対象は山岳体験から発想する環境デザインやエネルギー問題へと向かったが、その根っこにはいつも私は何者か、私はどこに向かうのかといった哲学的命題が潜んでいる。

山岳文化学会、総合人間学会の両者にとつたテーマを統合させてみると、論者が求めてやまない人間探求の道に向かい、未来への扉が開かれたように感じた。

(2008. 05. 27)

引用文献及び参考資料

- 1 Mark Solms & Oliver Turnbull : The Brain and the Inner World (脳と心的世界) 平尾和之・訳, 星和書店, 2007. 07
- 2 米山俊直: 私の比較文明論, 世界思想社, 2002. 12, 9-11
- 3 小尾信彌: 宇宙から見た人間, 総合人間学の試み (総合人間学会), 学文社, 2006. 11, 43-59
- 4 佐藤節子: 競争・共生・寛容—生態学から, 総合人間学の試み (総合人間学会), 学文社, 2006. 11, 149-168
- 5 坂本百大: 機械としての人間, 総合人間学の試み (総合人間学会), 学文社 2006. 11, 88-101
- 6 田中文夫: 山岳文化環境 (試論), 日本山岳文化学会論集第1号, 2004. 11, 28-36
- 7 木村敏 (2005): 精神医学から見た正常と異常, 人間はどこに行くのか (総合人間学会), 学文社, 2007. 5, 176